

看護職の「専門職化」追求に思う

鵜沢由美子

日本大学経済学部非常勤講師, 社会学・ジェンダー研究

昨今の看護職の人気には目を引くものがある。高校生が将来なりたい職業も、小学1年生の子供を持つ親が子供に就いてほしい職業も、看護婦がトップ(女子の場合)という結果が相次いで発表された。また、OLなど他業種を経て看護婦を目指す転身組も確実に増えているという。私が教えるに伺っている看護学校でも、学生は期待に胸をふくらませて看護婦になる夢を語る。「人に喜ばれて働き甲斐、やりがいがある」「社会の高齢化に伴い、より必要とされる」「一生続けられる資格を得られる」仕事と。また、卒業後のライフコースについて聞いてみると、毎回感心することがある。何らかの形で看護の知識・技術・資格を活かし、生涯関わっていかうという意欲に満ち満ちているのだ。

しかし、現実には看護職者が激しいストレスにさらされ、保健医療職の中でも、バーンアウト、いわゆる「燃えつき症候群」にかかる率が顕著に高いということは知られている。また、看護婦不足の問題は幾度となく世間の耳目を集めてきた。三交代制の激務、患者の生死と向き合う緊張、医師をはじめ他の保健医療職者との間の葛藤など、そのストレスを挙げればきりがないほどである。加えて、看護職者には、心優しく責任感が強く、頑張り屋が多いことは患者になったことのある人は誰でも、つまり多分皆知ることでもある。

さらに、気にかかるのは、看護界に深く根ざす看護職者の「専門職化」に対する一種の強迫観念である。いわ

く「看護職は準(半)専門職である」「看護職は専門職化の途上にある職業であり、医師などのような『確立した専門職』を目指さねばならない」など、その真摯で一直線な眼差しである。夢や希望であふれんばかりの新米看護職者が、「この職業は中途半端なんです」と聞かせ続けられれば、嫌気がさすかもしれない。

そのような論旨の基礎にあるのは、社会学を中心とした「専門職(=プロフェッション)論」であるが、

注意していただきたいのは、専門職(=プロフェッション)とはあくまで理念型であるということだ。その理念型との距離で各職業のあり方は測られるのであり、医師や弁護士とても「非専門職化」をはらむ職業なのだ。専門職性が問われなければならないとしたら、専門職として考えられる

すべての職業の内実が検討されるべきであろう。

かもめはかもめ、白鳥は白鳥。看護職の特性を十全に伸長させる中で、専門職化は追求されることが望ましいと思われる。相次ぐ看護大学の新設、高齢化社会の進展に伴う療養重視の傾向など、看護職が専門職性の要件であるとされる「専門性」や「自律性」を高めるのに追い風が吹いていると思われる。しかし、それだけではなく、専門職に欠かせないのは「サービス観念」である。他の職業のあり方にいたずらに惑わされることなく、自信をもって本来持ち得る特性を育てていただきたいと思う。多様な個性と経験を有し、意欲のある新参入者を迎えられる看護界に期待したい。

